

令和 3 年 6 月 30 日現在

機関番号：34430

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2020

課題番号：18K02743

研究課題名(和文)「学び続ける教師」を育成する教員養成プログラムの開発：初年次教育に関する介入研究

研究課題名(英文) Development of a first-year education program for enhancing lifelong learning attitudes and skills for prospective teachers

研究代表者

梶田 叡一 (Kajita, Eiichi)

桃山学院教育大学・人間教育学部・教授

研究者番号：70000065

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、学び続ける態度を備えた教員を育成するプログラムを大学の教員養成課程において開発し、その効果を測定することを目的としている。開発にあたっては以下の点で独自性のあるものを目指した。学び続ける教師の基盤的能力として、教職についての知識よりも「学ぶ態度」の習得を重視し、初年次のプログラムとした。「学ぶ態度(マインドセット)」と「学習方略」の習得においては、最新の学習科学の知見を取り入れ、少人数での協同的学習を行った。本研究の結果、開発された初年次教育プログラムは受講者のマインドセットの変化を促し、大学在学中の効果的な学習方略への理解深化に一定の効果があることが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子どもたちの生きる力を高めるため、教員養成大学においては、働きながら新たな知識・技能を身に付け指導能力を高めていく「学び続ける教師」を育てていくことが重要な課題となっているが、教職課程においては教職としての基礎知識を扱うことが目的とならざるを得ず、学びに向かう意識(マインドセット)は十分に高められていない。

本研究で開発したプログラムは、心理学の知見にもとづいてこのマインドセットを「学び続ける教師」としてのものに転換し、効果的な学習方略を学ぶことによって学生が大学での学びだけでなく将来の子どもたちへの指導にも活かせるようになることを目的としており、今後の教員養成に貢献するものである。

研究成果の概要(英文)：In this research we developed an educational program intended to train prospective teachers with attitudes related to lifelong learning, and evaluated the effectiveness of the program.

The uniqueness of the program is as follows; 1) the program is offered to first-year university students because we focus on learning mindset rather than knowledge of the teaching profession. 2) based on latest studies in learning science, students acquired the learning mindset and learning strategy in a small cooperative group.

As a result of this research, we find that the program we developed promotes a change in the mindset of students and makes participants to use better strategy to learn.

研究分野：教育心理学

キーワード：大学初年次教育 学習方略 マインドセット ディベート 学び続ける教師 ディベート

### 1. 研究開始当初の背景

大学のユニバーサル化(大衆化)が進む昨今、学士課程教育の質保証に関する取組が注目されている。その中心である初年次教育は、高い普及率を示す反面、今後の課題として、「各機関のニーズに特化し学士課程との連続性を視野に入れた効果的なプログラムの開発」ならびに「その成果を測定する指標の確立」が指摘されている(山田, 2013a)。また、教職課程を有する今日の大学では、「ボトムダウン」(学生の基礎学力の低下)と「トップアップ」(新任教員に対する即戦力の要請)による乖離が広がる一方で、各大学の「質保証」への対応が、本来重視されるべき教職の独自性や専門性に依拠したのではなく、社会人基礎力のような「周辺」の取組に終始しているという指摘もある(高旗, 2015)。

ここで、中央教育審議会(2015)の答申に目を転じると、今後養成されるべき教員の姿として、探究力を持ち、知識・技能の刷新を絶え間なく行うことのできる「学び続ける教員像」が提言された。また、「チームとしての学校」(文部科学省, 2015)の実現を通して各専門職の役割が精選されると、教職における「教科(学習)指導の技術」の位置づけは、その重要性を高めるだろう。教員養成課程においても、教科や教養に関する知識はもとより、エビデンスに基づく効果的な学習指導方法の修得を念頭に置く必要がある。すなわち、「学ぶ態度と効果的な学習方略を兼ね備えた学び続ける教員の基盤づくり」が、これからの教職課程における質保証の取組に求められているのである。しかし、管見ながら、こうした態度と技術を体系的に育成する教育実践は見当たらない。

こうした背景のもと、本研究は次のような動機を持って行われた。第一に、「学び続ける教員」となるために、単なる知識や技能ではなく「学ぶ(学びに向かう)態度(マインドセット)」を身に付けるようなプログラムを開発すること。第二に、開発されるプログラムは、学生が自らの学習態度と技術の変容を実感し、勉学に対する苦手意識を克服することのできるものとしていくこと。このようなプログラムを通じて、教職を目指す学生が、学習に躓く子に寄り添いそうした子どもの学習意欲を高める方法を習得することによって、彼らが将来的に、困難を抱える児童生徒を指導・支援する際の強みとなるだろう。

### 2. 研究の目的

教員養成課程の大学生を対象に、「学び続ける教員」の基盤となる態度・技術の育成を目的とした教育プログラムを実施し、その効果を検証することを目的とする。その特色として、第一に、大学教員一人につき5名程度の学生から構成される少人数指導(チュートリアル)制度のもと、授業外での協働学習を展開する。第二に、真の意味での態度や技術の修得を目指した教育とその評価は「人間の<こころ>=内面世界の基本構造」に立脚した理解のもと行われるべきである。そこで、これまでの自己意識論(梶田, 1988; 1998; 2011)や、近年の科学研究(Kahneman, 2011 村井訳 2012; Wilson 2002, 村田監訳 2005)の知見に依拠しつつ、意識領域のみならず無意識領域までもも含んだプログラムを実施しその効果を測定する。

具体的には、まず、能力は努力により可変的か否かという「無意識的な知能観/マインドセットの改善」(Dweck & Leggett, 1988)に着眼する。これは、困難な学習課題への接近・回避の予測因となるため(Dweck & Master, 2008)、課程内授業、採用試験、教職着任後の継続的な学習態度の基盤となるだろう。次に、近年その効果が実証されている「自己調整学習や学習方略といったスキルの熟達化」(Zimmerman & Schunk, 2011)を採りあげる。学生自身が効果的な学習スキルに習熟することで、将来的な学習指導の基盤形成を目指す。

### 3. 研究の方法

本研究では、初年次教育の文脈において、「学び続ける教員」の基盤となる態度・技術を育成する以下二点のプログラムを開発・実施した。

#### (1) チュートリアル・プログラム

授業外(課程外)時間を利用した、研究分担者の指導する少人数のゼミ形式で実施された。具体的な内容として、知能観(マインドセット)や自己調整学習・学習方略に関する教育の享受(例えば Zimmerman et al., 1996 塚野・牧野訳 2008; Blackwell et al., 2007)、エビデンスに基づく学習態度・技術に関する文献購読の担当、エビデンスに基づく短期的な自主学習プランの立案と振り返り、基礎学力向上のための学習等が含まれた。

2018年度は、文献購読を中心とした全10回のプログラム(90分×10回)、2019年度は、演習に重きを置いた全4回(90分)+ホームワークのプログラムで構成された。

#### (2) ディベート・プログラム

チュートリアル・プログラムの課題を踏まえ、学生自身の主体的な活動時間を増やすことで、学びに向かう態度を涵養するディベート・プログラムを実施した。当該プログラムは、オリエンテーション(学校教育現場における「答えの出しづらい問い」と「学び続ける態度」の関連性

ノアクティブラーニングの手法としてのディベートに精通する必要性等の教示), ランダムに振り分けられたチームで, 自陣営に割り当てられたテーマに関する主張を準備, プログラムに  
関与する教員からの助言をもとに主張を修正, 試合, という手順で進行がなされた。

#### 4. 研究成果

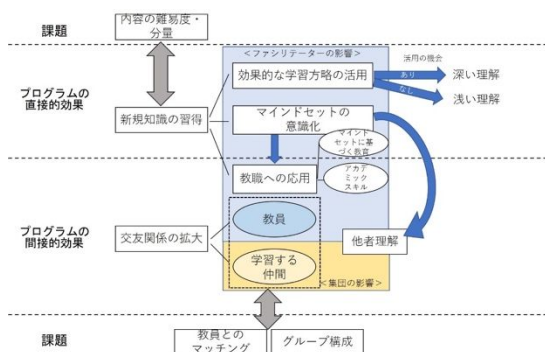
##### (1) チュートリアル・プログラム

【2018 年度】

186 名の学生 (入学者実数) に対してアナウンスを行い, 合計 41 名が参加を表明した。最終的には, 介入群 25 名 (男性 13 名, 女性 12 名) 統制群 107 名 (男性 63 名, 女性 44 名) を分析の対象とした。効果測定は, 潜在 (無意識) 的知能観: 知能観 Implicit Association Test (藤井, 2009), 顕在 (意識) 的知能観: 知能観尺度 (藤井, 2010), 自己調整学習方略: Self-Regulated Learning Strategy (SRLS) 尺度 (畑野ほか, 2011), 学習方略への期待: 方略保有感尺度 (梅本, 2012), 友人との学習: 友人との学習尺度 (上淵ほか, 2016), 主体的な学習態度: 主体的な授業態度尺度 (畑野・溝上, 2011) などの尺度を用いた質問紙調査 (実施前: T1; 実施後: T2) と, インタビュー調査を行った。

各指標の変化量 (T2-T1) を従属変数に, 実施 (介入・統制) 条件を独立変数とした分散分析を行なった。潜在的知能観は, 両条件とも増大的知能観の増加がみられたが, その差は統制群の方が顕著 ( $d = -.453, p = .047$ ) であった。顕在的知能観は, 介入群では増大的知能観への変化が, 統制群では固定的知能観への変化が見られたが, 統計的な有意性は示されなかった ( $p = .261; d = .254$ )。学習方略尺度は, 変化量 (T2-T1) に対する主成分分析により合成された主成分得点を従属変数として用いた。その結果, 介入群は統制群に比べ, 流暢性の錯覚に陥らないよう, 問題 (クイズ) の自作など「望ましい困難」を学習にとりいれるようになっていた ( $d = .448, p = .046$ )。

また, 11 名へのインタビューを通じて, 参加学生は, 「効果的な学習方略」や「マインドセット」, 「教職への応用」が可能知識を修得したことが示された (右図)。マインドセットは, 自己理解や他者理解のほか, 子ども理解を促進し得ることが示唆された。学習方略は, 実際の活用が, より深い理解に結びつくようであった。また, 少人数制の協働学習が交友関係を拡大させること, ファシリテーター (教員) や集団構成員のあり方が, 学びを左右し得ることが明らかになった。



【2019 年度】

2018 年度プログラムを受け, より持続可能な介入のあり方へと改善した。知能観や学習方略に関する知識の教授は, 全 1 年次生が受講する初年次教育科目の一部として導入し, これらの知識を応用する演習活動を, 授業時間外のゼミ形式で扱った。1 年次生 21 名が参加し, 14 名からプログラムの振り返りアンケートが得られた。その結果, マインドセットに対する「理解の深まり」は  $M = 8.79$  (1: 深まらなかった~10: 深まった;  $SD = 1.37$ ), 「日常生活で活用する自信」は  $M = 8.07$  (1: 深まらなかった~10: 深まった;  $SD = 1.69$ ) であった。自己調整学習に対する「理解の深まり」は  $M = 8.43$  ( $SD = 1.70$ ), 「日常生活で活用する自信」は  $M = 8.29$  ( $SD = 1.70$ ) であった。

プログラム全体の満足度は  $M = 8.93$  ( $SD = 1.14$ ; 10 件法), 役に立ったと感じる度合いは  $M = 9.00$  ( $SD = 1.52$ ; 10 件法) であった。満足度の評価理由には, 「自分の日々の勉強のサイクルを習慣づけることができ, 学習が効率よく行えるようになった」, 「いろんな場面でしなやかマインドセットを意識するようになったので, とても充実した授業だった」, 「色々な視点から『教育』を学ぶことができた」といったものがあげられた。役に立った度合いの評定理由には, 「ポジティブに前に進めるようになった」, 「子供達に, どのようにすれば勉強のやる気が引き出せるのか, どのような声かけをすればいいかをまなべた」等の記述が含まれていた。

本プログラムを「次年度の後輩に薦めるかどうか」については,  $M = 8.79$  ( $SD = 1.56$ ; 10 件法) で, 「教師になるために必要な力をつけられる場所」, 「楽しく必要なことを学べる」, 「友人との理解の深め合い」, 「自分の考えだけでなく, 様々な視点から行動できるようになる」といった理由が列挙されていた。

##### (2) ディベート・プログラム

【2018 年度】

参加意図を示した 16 名のうち, ディベート当日の欠席者 2 名を除く 14 名から, 介入後に実施した質問紙への回答が得られた。批判的思考態度 (平山・楠見, 2014) の文言を一部変更し, 批判的思考態度を涵養することについての動機づけを尋ねた (各下位尺度 2 項目; 5 件法)。論

理的思考への自覚 ( $M = 9.07$ ,  $SD = 1.86$ ), 探究心 ( $M = 8.86$ ,  $SD = 1.79$ ), 客観性 ( $M = 7.86$ ,  $SD = 1.66$ ), 証拠の重視 ( $M = 7.93$ ,  $SD = 2.20$ ) それぞれについて, 高い評定値を示した。

また, プログラムに対する有意義度を従属変数に, 探究心と知能観を説明変数 (ステップ1; ステップ2ではこれらの交互作用項を追加) とする階層的重回帰分析を行った。ステップ1のモデル (調整済  $R^2 = .786$ ,  $p = .000$ ) において, 有意義度と探究心は有意な関連を示したが ( $\beta = .860$ ,  $95\%CI [.577, 1.143]$ ,  $p < .01$ ) 知能観とは有意な関連を示さなかった ( $\beta = .232$ ,  $95\%CI [-.051, .515]$ ,  $p < .10$ )。

さらに, プログラムの有意義度についての自由記述を分析したところ, 「多様な考えを理解することの価値」, 「論理的思考・主張への意識」, 「学びへの意識 (探究心) の高まり」といったカテゴリーが得られた。学生は, ディベートを通じて, 「生涯にわたり新しいことを学びつづけた」といった, 学び続ける態度を望ましく感じるようになることが示唆された。

#### 2019年度

16名の学生がプログラムへの参加を表明し, 当日の欠席者や回答に不備があった者を除外し, 13名 ( $M = 19.6$ 歳; 男性8名, 女性5名) を分析の対象とした。効果測定には, 知能観尺度 (及川, 2005), 批判的思考態度尺度 (平山・楠見, 2004), ディベートの学習成果 (独自に作成) 等を用いた。

探究心 (T2) を従属変数に, 探究心 (T1) と教師に必要な知識を説明変数 (ステップ1; ステップ2ではこれらの交互作用項を追加) とする階層的重回帰分析を行った。ステップ2のモデル ( $F[3, 8] = 7.58$ ,  $R^2_{adj} = .642$ ,  $p = .010$ ) において, 探究心 (T1) と教師に必要な知識の交互作用項が有意であり, 単純傾斜検定を行ったところ, 「探究心 (T1) の低い」条件において, 教師に必要な知識と探究心 (T2) の間に正の関連が示された ( $b = 7.30$ ,  $t[8] = 3.84$ ,  $p = .005$ )。

準実験デザインのため結果の解釈に制約はあるものの, ディベートを通じて, 「同じグループの学生と議論を重ねることで, 自分の視野が広がった」, 「教師になるにあたって必要な知識をまだまだ備えていない」等の学びを実感した場合, 特に探究心が低かった学生において, 学び続ける態度が向上することが示唆された。

#### (3) 総括

本課題では, 「学び続ける教員」となるために, 教職に関連する知識や技能のみならず, 自らが「学ぶ (学びに向かう) 態度 (マインドセット)」を身に付けるようなプログラムを開発した。初年度は, その効果は限定的であったものの, 参加学生の学び続ける意欲, エビデンスに基づく学習方略の活用頻度が向上したことが示唆された。また, 二年度目には, 学生が自らの学習態度と技術の変容を実感できるよう, 演習をふんだんに取り入れたプログラムに改変したところ, マインドセットや学習方略への理解度および活用への自己効力は, 高い値を示した。学校教員経験のあるチューターのファシリテーションのもと, 少人数で議論を重ねたり, また, 実際に日常生活で, マインドセットや自己調整学習方略を活用する機会 (および, その成果のシェアリング) を得たりすることで, その学習効果は高まるものと思われる。同様に, ディベート・プログラムによる対話的な学びを通じて, 「答えの出しづらい問い」に対峙することが, 探究心を涵養する効果をもち得ることも示唆された。

一連のプログラムを通じて, 学生の学び続ける態度が一時的に向上する傾向は確認されたものの, そうした態度が, 教職課程関連科目, 各種実習や教員採用試験に向けた自主的な学習活動等の学びをどの程度支え, 実りあるものにしていくのか, その効果を検証することは今後の大きな課題である。そのような作業を通じて, 学士課程で「学び続ける教員」を育成するためのロードマップをより精緻化していく必要がある。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村上祐介、梅井大輔、飯田真人、柴恭史、高木悠哉、八木利津子、Decker Warren、大畑昌己、今宮信吾、山本弥栄子、間處耕吉、山口聖代、鎌田首治朗、梶田叡一	4. 巻 2
2. 論文標題 初年次教育における「学び続ける教員養成プログラム」の開発 マインドセットと学習方略に焦点をあてた少人数制教育	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 157-174
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上祐介、柴恭史、飯田真人、山口聖代、Decker Warren、安井茂喜、高木悠哉、八木利津子、大畑昌己、今宮信吾、山本弥栄子、間處耕吉、梅井大輔、鎌田首治朗、梶田叡一	4. 巻 2
2. 論文標題 「学び続ける教員」育成におけるディベート・プログラムの実践 批判的思考態度への動機づけに着目して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 175-189
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 村上祐介、柴恭史、安井茂喜、八木利津子、今宮信吾、山本弥栄子、高木悠哉、山口聖代、Decker Warren、梶田叡一	4. 巻 3
2. 論文標題 「学び続ける教員」育成におけるディベート・プログラムの実践（2） 対話的な学びと批判的思考態度との関連	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 桃山学院教育大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 132-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 村上祐介、梅井大輔、柴恭史、高木悠哉、	
2. 発表標題 教員養成における「学び続ける教員」育成プログラムの展開（1） インプリシット知能観への介入を見据えた予備的検討の成果	
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会自主企画シンポジウム	
4. 発表年 2019年	

1. 発表者名 村上祐介
2. 発表標題 桃山学院教育大学 初年次教育プロジェクト「11人の侍」実践報告
3. 学会等名 日本人間教育学会第5回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	鎌田 首治朗 (KAMADA Shujiro)  (40599354)	桃山学院教育大学・人間教育学部・教授  (34430)	
研究分担者	飯田 真人 (IIDA Masato)  (00781064)	京都市立芸術大学・美術学部・教授  (24301)	
研究分担者	高木 悠哉 (TAKAKI Yuya)  (40572350)	桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授  (34430)	
研究分担者	村上 祐介 (MURAKAMI Yusuke)  (10780190)	桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授  (34430)	
研究分担者	柴 恭史 (SHIBA Takafumi)  (80761139)	桃山学院教育大学・人間教育学部・講師  (34430)	

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	今宮 信吾  (IMAMIYA Shingo)  (60780236)	桃山学院教育大学・教育学部・教授    (34430)	
研究分担者	山本 弥栄子  (YAMAMOTO Yaeko)  (80450097)	桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授    (34430)	
研究分担者	梶井 大輔  (KAKOI Daisuke)  (90780338)	桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授    (34430)	
研究分担者	大畑 昌己  (OHATA Masaki)  (10802556)	桃山学院教育大学・人間教育学部・教授    (34430)	
研究分担者	DECKER Warren  (DECKER Warren)  (60825313)	桃山学院教育大学・人間教育学部・准教授    (34430)	
研究分担者	八木 利津子  (YAGI Ritsuko)  (00780313)	桃山学院教育大学・人間教育学部・教授    (34430)	
研究分担者	山口 聖代  (YAMAGUCHI Masayo)  (00805046)	桃山学院教育大学・人間教育学部・講師    (34430)	
研究分担者	間處 耕吉  (MADOKORO Kokichi)  (00757049)	盛岡大学・文学部・教授    (31203)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------